

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 8 日現在

機関番号：32612  
 研究種目：基盤研究(A) (一般)  
 研究期間：2012～2016  
 課題番号：24242009  
 研究課題名(和文) 宮内庁書陵部収蔵漢籍の伝来に関する再検討 デジタルアーカイブの構築を目指して  
  
 研究課題名(英文) Redefining the circulation of Chinese Books in the Japanese Imperial Library;  
 Aiming at the Construction of Digital Archive  
  
 研究代表者  
 住吉 朋彦 (SUMIYOSHI, Tomohiko)  
  
 慶應義塾大学・斯道文庫(三田)・教授  
  
 研究者番号：80327668  
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 29,300,000円

研究成果の概要(和文)：近世以前の日本における学術の基礎を提供した漢籍(中国の古典)について、宮内庁書陵部の蔵書を実地に調査し、伝存する原本の意義と、日本文化への貢献について考察するための基本情報を整理し、学術的検討を加えた。  
 上記の研究に伴い、23名の研究者による、のべ759日間、626部7232点の原本調査を実施し、172部8705点について書誌データの定位を行う一方、229部9145点、279123齣に及ぶ全文のデジタル映像データを作成した。これらの研究成果を共有するため、最重要文献138部8054点を選び、書誌と全文映像のデータベースを統合する、デジタルアーカイブ「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」をウェブに公開した。

研究成果の概要(英文)：This project featured Chinese classics which provided basis of the scholarship in Japanese society before the Modern era. Therefore we investigated original manuscripts and printed books in the Japanese Imperial Library and composed bibliographical information for redefining importance of originals and its contribution to the Japanese culture. To realize this research, we conducted investigation for the 626 titles in 7,232 volumes spending 759 days by 23 researchers, composed bibliographical information of 172 titles in 8,705 volumes and made 279,123 digital images from 229 titles in 9,145 volumes. Eventually we exposed a digital archive named "Overview of Chinese Classics in the Japanese Imperial Library" onto the web. It integrates 2 databases both of bibliographical information and photo images included in the most important 138 titles in 8,054 volumes connected by a traditional classified catalogue.

研究分野：日本書誌学

キーワード：書誌学 版本研究 蔵書研究 漢籍 旧鈔本 宋刊本 金沢文庫 紅葉山文庫

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 日本の古典文化について考える時、日本語社会に特有の文化現象を問題とするために、漢字文化の受容について考慮すべきことは言うまでもない。しかし、多くの専門学科を立てるわが国近現代の人文科学研究において、多地域、多言語間の文化現象を扱う研究は、専門領域の周縁に位置付けられる傾きがあり、長い蓄積をもつ日本漢学の研究でさえ、日本学や中国学の周縁に置かれるケースが少なくなかった。

(2) これに対し漢字文化圏の中心を自負する中国では、中国文化の海外展開を視野に入れ、周辺地域への漢字文化の移植と、現地での貢献の在り方に関心が高まり、1990年代以降、その代表的事例として、日本漢学の研究が好んで行われるようになった。しかし、そうした東アジア圏の研究は、自国文化の他国への貢献という枠組みに当て嵌めて行われる傾向が強かった。

(3) そこで2000年代に入ってから、伝統的な素養を重視しつつも、日本文化の展開に対し、日本漢学の果たした役割を考える研究が、次第に盛んとなったが、それと同時に、漢字文化を抱合した日本語文化の在り方そのものが、アメリカ合衆国の学界を中心に、東アジアの外側から関心の対象とされる機会が増した。

(4) ただ個別の研究では、日本の漢字文献を新たに紹介したり、表現の影響関係を論じたりする方法が広く行われる一方、多くの文献を貫く学問的基礎に目を向ける研究には乏しく、いくつかの研究において、恣意性を防ぎ切れていない失敗例も、認められるに至った。その原因の1つは、漢学の基礎となった漢籍一般について、精確な知識を集めておくべき所、文学、歴史学、哲学といった内容による分科の弊害を被り、基礎分野に当たる書誌学の発展が阻まれている点にあった。

(5) 一方、デジタル化情報技術による社会変革は人文科学の世界に及び、学術情報の蒐集、普及についてはもちろん、歴史的文化状況をかつてない深度で俯瞰できる可能性が、次第に広がってきている。この点は、漢籍や漢学の研究という主題についても同様であり、具体的には、国内外各機関の提供する目録、書誌情報、画像資料が有効に参照され、研究の正確性と広がりを助ける状況となっていた。

(6) ただし、日本漢学の基礎となった日本伝来漢籍のうち、もっとも重要な宮内庁書陵部蔵書、特にその中の江戸幕府紅葉山文庫本、またその主要な来源となっている金沢文庫本については、半世紀以上も前の著録によって理解されている状況であり、一刻も早い更新が期待されていた。

(7) そこで本研究では、まず日本漢学の基礎を作った日本漢籍を対象とし、日本における漢籍伝来の屋台骨を担った書陵部蔵書について、国際的情報環境の中で抜本的な再検討を施し、書誌学研究を興隆した上、反転して書陵部収蔵の漢籍から得た学術情報を、デジタル化により学界に普及する構想を立てた。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究では、最重要の蔵書として逸早く研究が加えられ、早期に決定的な研究成果を得ていた宮内庁書陵部蔵書について、蔵書の中核を成している漢籍と、その背景を共有する漢訳仏典を取り上げ、『図書寮典籍解題漢籍篇』(1960)の発行から50年以上にわたる長い間隔を破り、国際的な比較研究を加えて、基礎認識の刷新を図った。

(2) 書陵部収蔵漢籍の研究を行う目的の第一は、それが恰も日本における漢学の背骨に相当することから、長い伝来の間の漢学の基礎過程を抽出し、客観的な日本漢学研究の展開に結び付けることであった。

(3) また副次的には、宋元明清といった中国の歴代宮廷や、高麗朝鮮といった韓半島の王朝の蔵書が、書陵部の蔵書に流れ込んでいるケースもあり、日本以外の経路を含む漢籍伝流の全面的理解についても、一定の貢献が見込まれた。

(4) さらに、書陵部収蔵漢籍の善本は、世界の漢籍の中でも、その伝来が非常に長く、現存の伝本を見渡しても、その源流に最も近い位置に立つ場合が少なくない。そこで本研究は、中国やその他の地域を含んで展開されている、漢籍研究全体への学術的貢献も、大きく期待された。

(5) そしてその成果は、日本漢学という文化現象を、東アジア文化研究の資料として、精確に位置付けることにもなることから、文献学、書誌学のフィールドとして、日本列島という環境が特殊な意義を帯びることを再認識し、それを扱うべき、日本書誌学発展の土壌を培うことに直結する。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究の最大の特徴は、研究の対象となる文献の全てに於いて、直接の目視による原本調査を加えたことである。宮内庁書陵部収蔵の貴重書は、すでに紙焼き写真による複製が完備し、個別の研究情報も少なくない。しかし、その文献の貴重性に鑑み、また基本情報刷新の可能性を迫るために、あらためて文献を手に取り、詳細かつ慎重な調査を加える作業を徹底して行った。

(2) その際、大きな障壁となった問題は、対象文献の数量の多さと、文献を書誌学的に扱い得る人材の乏しさとの、不均衡であった。そこで、研究組織編成の時点から、書誌学を専門とする機関の専任者に加え、研究分担者として、今回の調査研究に有効に参加し得る研究者を、組織の垣根なく鳩集する努力を払ったが、さらにその分担者を核に、所属機関や国籍を問わず、文献学に取り組む意欲をもった若手研究者を募り、各員が半年に及ぶ統一の研修課程を踏んで、原本調査に取り組む仕組みを考案、実行した。この結果、研究の中盤には、均質の調査を遂行する 20 名以上の態勢を築くことができた。

(3) また実際には、調査の着目点、判断の在り方、記述の方法等について、メンバー間で検討を重ね、規程を設けて調査を遂行し、その結果を共有するための準備とした。また可能な限り、二重の調査と記録確認を行う措置とし、データの採取に慎重を期した。こうして得た原本の書誌データは、一定の形式に整理した上、文献の性格を端的に説明する、目録条項に凝縮、標記した。

(4) これらの書誌データは、参加可能なメンバー全員の下で、それぞれの見識を踏まえて検討を加え、実証を基礎理念として生成した。また半世紀間の個別の研究の進展を踏まえ、先行する研究成果の反映に努めた他、デジタル化情報普及の状況を活かし、書籍やウェブを通じた内外関係資料の書誌書影収集と、書陵部蔵書との比較を、最大限行った。

(5) これに加え本研究では、研究開始の当初から、文献のデジタル画像作成を強力に進めてきた。この作業は、原本所有者である宮内庁書陵部との協議を経て、一貫した画像作成、保管方法を定め、専門の事業者に委託して行った。基本的にはデジタルカメラによる撮影を実施、色空間の再現にも留意して、カラー複製資料としての保存に耐える内容とした。ただし数千鈔以上の大きな文献については、資金投下の効率を考え、既存のマイクロフィルム画像によるデジタル化を選択した。

(6) デジタル画像の取得と整理は、原本の物理単位に従って行われ、原本調査の結果と緊密に連携するための措置を講じており、研究の中盤以降は、これらのデジタル画像も、調査結果の検討を行うために随時活用され、研究の遂行に大きな推進力を与えた。

(7) これを要するに、多くの人材による先入観を廃した原本の実見、多分野の背景をもったメンバーによる助言、最新の研究と情報環境、デジタル画像を使用した検討から、広く知られてきた貴重文献についても、その基本的認識と学術的な位置付けについて一歩を進めることができ、成果の収穫に繋がった。

#### 4. 研究成果

(1) 前項に記した書誌データと、それを根拠として標記した目録条項は、それ自体、書誌学研究上の大きな成果といえることができる。それは例えば、奈良時代書写の『大方広仏華嚴經』80 巻の残本 3 軸 (整理番号 512-48、512-69) が、東大寺尊勝院聖語蔵に伝わった、宝亀年間(770-81)の宮廷写経所制作に係る「一切経」の一部であること、鎌倉時代書写、金沢文庫旧蔵本『春秋経伝集解』30 軸(同 550-1)の一部が、弘長年間(1261-3)頃に、北条実時の作成した写本であること、また江戸幕府紅葉山文庫旧蔵、宋代(10-13 世紀)刊行の葉学書『本草衍義』(同 403-119)が、宋孝宗朝(1162-89)頃、江南西路(現江西省)転運司刊行『証類本草』の附刻本であることなど、新たに加えた見解は、枚挙に暇がない。

(2) 上記の例は、卷子本の深奥部にある、軸付け紙背面の断片的な墨跡から、担当した写経生の姓名が判明したケースで、目視によってのみ確定された情報である。また例は、姓名を欠く北条実時自筆奥書の筆跡の検討と、書誌学的見地から精確を期した、伝授奥書群の判読から証明された事実である。一方、例は、中国政府により 2008 年から成果公開の始まっている、国家珍貴古籍名録図録事業によって得られた、北京・中国国家図書館蔵本の書誌書影との比較によって採り得た事実であり、いずれも本研究採用の方法から導かれた結果と言える。

(3) そして、これらの見解のいずれもが、漢訳仏典や漢籍を受け容れ、解読し、伝承することから培われた日本漢学の過程を、具体的に表徴しているのであり、これらの調査結果を俯瞰することによって、聖語蔵、金沢文庫、紅葉山文庫における典籍の収蔵と、その継承が、古代、中世、近世を通じた、日本の学術の展開を大きく進め、規定してきたことを、明らかに証跡立てている。

(4) これらの研究成果は、以下の 2 つの方法により、社会に還元される。

その 1 つは、ウェブに公開されたデジタルアーカイブ「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧 書誌書影・全文影像データベース」によってである。

本研究における調査検討によって得た書誌データと、対象文献のデジタル化によって得た画像データは、それぞれ一個の電子的データベースとして組み上げる措置とした。これらのデータベースは、ソースの公開された既存流通のアプリケーションを組み合わせ構成し、データベースの永続性に配慮している。その表示は、データの内容本位とし、煩瑣を恐れず、専門の研究者の使用にも耐える、必要十分なデータを含むものとした。

また本研究では、書誌データから抽出される目録条項を集め、関係文献の分類目録を作成したが、本アーカイブは、その分類目録によって、文献の書誌データベースと画像データベースの双方に関連付け、両者を有機的に照応させる仕組みを備えている。このように、図書の分類目録によって架橋した書誌データベース、画像データベースの複合体が、デジタルアーカイブ「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」である。

本アーカイブは東アジア研究者の国際的関心を集めることが予見されたため、2014年3月に北京大学(中華人民共和国)で行われた「東亜漢籍研究;以日本古鈔本及五山版漢籍為中心」国際學術討論会、同8月にソウル国立大学校(大韓民国)で行われたソウル国立大学校奎章閣国際シンポジウム「東アジアの出版文化;知識の形成および流通」において内容の紹介と意見聴取を行い、中国国家図書館善本特蔵部、上海図書館善本部とも緊密に連絡を取って、海外への普及につき考慮した。

また研究の進捗に従って登録件数を加え、国内の関係機関内設置端末での公開、パスワードの配布による学界への公開、海外での動作確認などの段階を経て、2016年6月4日をもって、全面的なウェブ公開を実施した。

この際、同日開催の国際研究集会「宮内庁書陵部収蔵漢籍画像公開記念国際研究集会 日本における漢籍の伝流 デジタルアーカイブ「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」の視角」に、メンバー全員が主体的に参画し、アーカイブの公開を報告するとともに、内外の識者から意見を聴取して、研究内容の発表も行った。本データベースは、宮内庁当局とも連携し、今後も収録を増加する方針である。

この集會には、大学や研究機関、図書館、出版社を始め、書籍をめぐる多分野からの参加があり、その一割強は、中国を中心とする外国籍の参加者であった。当日の質疑も活発で、データベースの公開以降は、SNSでの言及を含む、強い反響があった。

現在、宮内庁書陵部の運用する「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」トップページと検索結果及び、本研究の幹事機関である、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫、東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センターのウェブサイトトップページに、当該データベースへのリンクが置かれ、データの公開は順調に推移している。

成果還元のもう1つの方法は、図書の出版である。本研究では、上記の研究成果を報告するため、宮内庁書陵部図書寮文庫収蔵の、漢籍貴重書の図録解題と研究論文集を兼ねた、『図書寮漢籍叢考』の出版を計画している。

本書については、すでに初稿を完成、平成29年度日本学術振興会科学研究費補助金・研究成果公開促進費を申請し、助成を認めて頂いた所である。

本書は大きく解題編と論説編に別れ、解題編ではデータベースにも活用した書誌データと写真画像を用い、書誌データでは割愛した学術的判断の過程について、参考情報を加えながら平易に述べ、図版もウェブ用の軽便なデータではなく、出版用に精緻な画像を再作成した。

論説編では、書誌調査研究から得た所の、個別の図書の歴史的な意義付けにつき、研究参加者が論点を深めて、論文にまとめ収録した。また併せて、本分野におけるデータベース活用の意義につき、米韓中日の研究者から寄稿を得て、論説を附載した。

本書は学術的内容を核としながら、内外の知識人一般に向けた情報提供を目指し、本報告書提出時現在、着実に完成に向かっており、平成29年度中に発行の予定である。

(5) 最後に、本研究の副次的な成果として、研究分担者以外に14名、米韓中日の若手研究者(大学院生、ポスドクター他)が実際の調査研究に携わったことを挙げたい。

本研究では若手研究者が、わが国が世界に誇りうる国指定文化財級の漢籍の原本調査と書誌データ作成を経験したばかりでなく、それらを素材とした解題執筆、研究報告、論文発表にも進むという実績を遺した。その具体的な成果は、上記(4)の双方に含まれており、日本における書誌学研究的の今後に足跡を残し得た点を附記して措きたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計69件)

山田尚子、「詩」と「酔」の空間、成城国文学論集、査読無、39、2017、133-155

大木康、中国における線装本の普及とその背景、韓国文化、査読有、72、2016、3-20

金文京、『全宋文』訂正一則 江萬と江萬里、汲古、査読無、70、2016、18-21

佐藤道生、伝授と筆耕 吳三郎入道の事績、中世文学、査読有、61、2016、77-86

上原究一、明末の商業出版における異姓書坊間の広域的連携の存在について、東方学、査読有、131、2016、52-70

河野貴美子、身延文庫蔵『弘決外典鈔』古鈔本初探、日本古鈔本与五山版漢籍研究論叢、査読無、-、2015、199-217

住吉朋彦、『方輿勝覽』版本考、斯道文庫論集、査読無、49、2015、167-237

小倉慈司、宮内庁書陵部所蔵京都御所旧蔵本の由来 吹上御文庫本の検討、国立歴史民俗博物館研究報告、査読有、186、2014、83-207

高橋智、種徳堂本『春秋経伝集解』について、高田時雄教授退職記念 東方学研究論集、査読無、-、2014、143-152

堀川貴司、官版集部について、国語と国文学、査読無、91-5、2014、140-151

陳捷、シーボルトコレクションの和刻本漢籍について、シーボルト日本書籍コレクション 現存書目録と研究、査読無、-、2014、580-601

永富青地、内閣文庫蔵『鄒東郭先生詩集』について、汲古、査読無、66、2014、1-6

〔学会発表〕(計 49 件)

河野貴美子、Legend, Lexicon, Commentary: The Lotus Sutra in Japanese Letters、Association of Japanese Studies Conference: WORD/IMAGE/JAPAN、2016年10月29日、ペンシルバニア大学(ペンシルバニア州センター郡、アメリカ合衆国)

小倉慈司、宮内庁書陵部所蔵の聖語蔵関係経巻について、宮内庁書陵部収蔵漢籍画像公開記念国際研究集会 日本における漢籍の伝流 デジタルアーカイブ「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」の視角、2016年6月4日、慶應義塾大学(東京都港区)

佐藤道生、『古文孝経』永仁五年写本の問題点、宮内庁書陵部収蔵漢籍画像公開記念国際研究集会 日本における漢籍の伝流 デジタルアーカイブ「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」の視角、2016年6月4日、慶應義塾大学(東京都港区)

上原究一、徳山毛利家旧蔵「伝奇四十種」所収『楊東萊先生批評西游記』の書名改刻をめぐって 原題は『李卓吾先生批評西游記』か?、宮内庁書陵部収蔵漢籍画像公開記念国際研究集会 日本における漢籍の伝流 デジタルアーカイブ「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」の視角、2016年6月4日、慶應義塾大学(東京都港区)

金文京、展望 21 世紀的東亜比較文学、中国古代文化経典在海外伝播及影響研究 以二十世紀為中心国際學術研討会、2015年12月15日、北京外国語大学海外漢学研究中心(北京市、中華人民共和国)

永富青地、明代書院の出版 以湛若水著

作為例、「理学与嶺南社会」国際學術研討会、2014年6月27日、中山大学嶺南文化研究院(広州市、中華人民共和国)

佐藤道生、關於旧鈔金沢文庫本『春秋経伝集解』、「東亜漢籍研究;以日本古鈔本及五山版漢籍為中心」国際學術討論会、2014年3月15日、北京大学(北京市、中華人民共和国)

陳捷、關於『祖庭事苑』及其版本情況、「東亜漢籍研究;以日本古鈔本及五山版漢籍為中心」国際學術討論会、2014年3月15日、北京大学(北京市、中華人民共和国)

大木康、16,17 世紀 世界の文学、復旦大学文史研究院、プリンストン大学東アジア学部・研究所、東京大学東洋文化研究所国際學術會議「せめぎあう「世界史」」、2013年12月16日、プリンストン大学(プリンストン市、アメリカ合衆国)

高橋智、種徳堂本『春秋経伝集解』について、「日本漢籍集散の文化史的研究 通時的蔵書研究の試み」成果報告会、2017年12月7日、東京大学(東京都文京区)

堀川貴司、漢籍から見る日本の古典籍 版本を中心に、国文学文献資料調査員會議、2013年6月6日、国文学研究資料館(東京都立川市)

住吉朋彦、九条家本『白氏文集』卷十六 殘簡出現の意義、歴博国際シンポジウム「東アジアを結ぶ漢籍文化 敦煌から正倉院、そして金沢文庫へ」、2012年11月3日、国立歴史民俗博物館(千葉県佐倉市)

〔図書〕(計 16 件)

河野貴美子(共編)、勉誠出版、アジア遊学 199 衝突と融合の東アジア文化史、2016、199

小倉慈司(共編)、同成社、東アジアの文化交流、2016、209

大木美乃・佐藤道生・住吉朋彦・堀川貴司・山崎明・山田尚子、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵大曾根章介綾装本待修目録并解題、2016、116

金文京、京都大学人文科学研究所、藤塚鄰博士遺品展示会目録・解題、2015、38

大木康、上海古籍出版社、明末江南の出版文化、2014、190

陳捷、中華書局、人物往来与書籍流転、  
2012、511

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

デジタルアーカイブ「宮内庁書陵部収蔵漢籍  
集覧 書誌書影・全文影像データベース」  
URL <http://db.sido.keio.ac.jp/kanseki/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

住吉 朋彦 (SUMIYOSHI, Tomohiko)  
慶應義塾大学・斯道文庫・教授  
研究者番号：80327668

(2) 研究分担者

堀川 貴司 (HORIKAWA, Takashi)  
慶應義塾大学・斯道文庫・教授  
研究者番号：20229230

河野 貴美子 (KONO, Kimiko)  
早稲田大学・文学学術院・教授  
研究者番号：20386569

(平成26年度より研究分担者)

小倉 慈司 (OGURA, Shigeji)  
国立歴史民俗博物館・研究部・准教授  
研究者番号：20581101

上原 究一 (UEHARA, Kyuichi)  
山梨大学・総合研究部・准教授  
研究者番号：30757802  
(平成27年度より研究分担者)

陳 捷 (CHIN, Sho)  
国文学研究資料館・研究部・教授  
研究者番号：40318580

金 文京 (KIN, Bunkyo)  
鶴見大学・文学部・教授  
研究者番号：60127074

佐藤 道生 (SATO, Michio)  
慶應義塾大学・文学部・教授  
研究者番号：60215853

山田 尚子 (YAMADA, Naoko)  
成城大学・文芸学部・准教授  
研究者番号：60537091  
(平成27年度より研究分担者)

大木 康 (OKI, Yasushi)

東京大学・東洋文化研究所・教授  
研究者番号：70185213

高橋 智 (TAKAHASHI, Satoshi)  
慶應義塾大学・斯道文庫・教授  
研究者番号：80216720

會谷 佳光 (AITANI, Yoshimitsu)  
公益財団法人東洋文庫・研究部・研究員  
研究者番号：50445714  
(平成28年度のみ研究分担者)

永富 青地 (NAGATOMI, Seiji)  
早稲田大学・理工学術院・教授  
研究者番号：50329116  
(平成26年度のみ研究分担者)